

目次

はじめにー昭和は歴史になったのかー 2

●序章 昭和天皇を読み解く鍵 13

昭和天皇は立憲君主 14

帝国憲法の天皇 15

統帥権の実態 19

そもそも軍隊とは何か 21

クーデターができれば軍隊でない 23

立憲君主とは何なのか？ 26

帝国憲法と日本国憲法の違い 28

立憲君主の三つの権利 31

左翼は「東京裁判史観」ではない 34

歴史学の系譜 37

昭和天皇研究の進展 43

昭和天皇をめぐる悪書 44

●第二章 「暗い時代」へ？ 47

謝ってしまえばよかった張作霖爆殺事件 48

天皇は総理大臣の首を飛ばせる権力者ではない 52

ロンドン軍縮条約の実態 55

「憲政の常道」は暗殺ごときでビクともしない 60

ハイパーデフレが人心を蝕む 63

満洲事変が世論を変えた 66

一変した国際連盟の空気 70

「協力内閣」運動が大日本帝国を滅ぼした 76

元老の無責任 81

日本と世界の運命を変えた二日間 83

皇道派と統制派は同じ穴のムジナ	88
第一次上海事変は最後の勝利	91
五・一五事件で正論が通らなくなる	97
満洲国承認、陰謀論が国を滅ぼす典型的な例	103
国際連盟脱退推進論と未来への意思の欠如	108
熱河作戦への抵抗と限界	111

●第二章 泥沼の支那事変へ

121

なぜ狂った言論が罷り通ったのか	122
帝人事件と政党の無力	125
天皇機関説事件の狂気	129
二・二六事件、昭和天皇の激怒	134
軍事予算拡大の無限ループ	141
切り札になりえた幻の宇垣内閣	147

それでも「喰い逃げ解散」で敗北の陸軍 153

一九三七年七月七日の世界	155
生殺与奪の権をアメリカに握られている戦い	158
敵も味方もどこにもいない近衛文磨	160
盧溝橋事件——戦などやりたくなかった日本と蒋介石	164
事変はどうして止まらなくなったのか	169
頭に血が上った海軍が乱入	173
真面目に侵略する気がない	181
自分の首を締める近衛声明	185

●第三章 正論が通らなくなる

193

これやつときゃ正解だろ！で内閣改造	194
張鼓峰事件と昭和天皇の苦悩	197
宇垣の和平工作を潰す	201

無責任な内閣投げ出し	205
気の毒すぎた平沼騏一郎の評価	207
三国同盟を先送りするだけの内閣	210
日独伊防共協定強化の陥し穴	212
何もしない内にノモンハン事件	215
日米通商航海条約の破棄通告	218
複雑怪奇！しかし譲らなかった陸軍大臣人事	221
唯一の貢献が欧州大戦に不介入	225
ファシズムをを目指した近衛新体制	228
帰ってきた近衛文磨	232
●第四章 地獄へ滑り落ちる対米開戦	237
松岡旋風の功罪	238
北部仏印進駐、まったく先が見えなくなった和平	241
日ソ中立条約の真意	247
日米交渉の行方	250
近衛と東条も松岡についていけない	255
松岡洋右はドイツのスパイだったのか？	258
日本の参戦を望むヒトラー	262
北守南進の決定	266
関特演に怯えるスターリン	271
松岡洋右を外して南部仏印進駐へ	274
とうとうアメリカの経済制裁	277
集団ヒステリーで対米開戦準備	283
なぜ昭和天皇は開戦を止められなかったか	289
無視される大御心	295
「虎穴に入らずんば虎子を得ず」の真意	301

東条首相いわく、戦争の大義名分は「目下研究中」	304
アメリカから喧嘩を売ってきたハル・ノート	311
ルーズベルトは殺人鬼だった	318
なぜハワイへ？ 真珠湾攻撃をしてあげる	322

●第五章 破滅寸前の救国

皇居が空襲されたくらいで動揺	328
総力戦を理解していなかった日本	333
何がしたかったのかわからないミッドウェー海戦	336
弱いのに頑張ったアメリカ	339
ガダルカナル島を撤退	343
アッツ島玉砕とキスカ島撤退作戦の成功	346
絶対的国防圏と飛び石作戦	348
憲法違反の参謀総長兼任	352

東条倒閣は和平の必要条件	357
救国の布石	361
「政治」をやるうとしていた小磯首相	363
特攻隊もお役所仕事	366
今さら近衛上奏文	373
日ソ中立条約不延長通告	377
決定的な意味を持った人事	380
この期に及んでソ連にすぎる	382
ポツダム宣言の「黙殺」は首相の失言なのか？	386
御聖断——二十分間強の大演説	392
国体の護持と国民の自由意志	397
救国の君主	401
おわりに——どこが侵略戦争なのか？	406